

霜葉飛泉行

小笠原秀實

一

十一月七日(昭和十一年)秋雨を浴びて高野に行き、靈峰を拜み、山上に宿し、八日諸堂諸廟に詣で、林道を「光の瀧」に出で、霜葉を着て神谷に降り、上古澤より峻嶺を天野に越え、野山地主の社殿を拜み、山道幾里を暮靄にたぎり、妙寺より和歌山を経て歸る。揚悠迫らざるにも似、又匆忙の極まるにも似る。日程常規なきこゝ煙霞漂泊の嬉しさなり。この行聖教文化の精を求むる人々數姿、托興寄情の友なり。七日朝、車上の客こなる。微雨時に驟雨、又この日の淡彩なり。

しこぎふる雨に惱めばいつしかに淋しさ旅の姿湧き来る

見なれたる山々なれど雨雲の行き來うつろひ姿新し

旅程大阪に來り、天王寺より天下茶屋に出で、高野直通に依り、又索道を待む。半日の旅窓、車をかへるこゝ五度又六度、未熟の客、車事難透の關の如し。高野登攀の險坂、今尙かゝる形にその蹟を残す。靈山遂に難路難行の聖旨を含むか。

ある時は雨に痛めりある時は雨の親しさ旅靜かなり

なるまゝに託せ託せて蹈む旅の心さすりて秋の雨ふる

さまざまの人をば見たりさまざまの人は消えたりものを思はず

橋本にして纔に乳の暖きあり。

乳の香のわびしさ故か旅故か壺の熱きを手には握れり
やがて溪谷を走る。

もみぢみな雨に光れり落ち葉みな雨に光れり山の冷さ

谷水は白く躍りて幾ひろの低きに磨く秋さなりけり

極樂橋は朱き橋なり。鋼索動きに動き、車登りに登る。不動坂の險、今たゞ回顧に残る。車を出で、樓上に登り、食
み水を呼ぶ。輕きこゝ浮べる雲の如し。

見はるかす峰各はさまざまの雲の姿に人をもてなす

高根來てこの雨雲の描き行く姿姿を眺めてはあり

山上また車多し。

そほぬれて雨行くこゝもこゝろよきすさびこなりてこの山を行く

二

金剛峰寺に梶原氏を訪ね、旅程のすべてを託す。任運すべて他力なり。史家中田氏を請じて靈寶文書を訊ね、山上煙雨を縫ふて靈寶館に入る。今秋特別展觀この日この時に終らむこす。忙かざるあはたゞしさなり。國寶血曼荼羅、雄偉場内を壓す。平相國頭血を混じて中尊を畫かすこ云ふ。一門安泰の祈請か、長壽延命の願意か。過ぐる日寧樂に大佛殿を拜み、相國の第五子重衡の命運を吊ひ、二旬の後茲に相國血請の祈願を見る。傳承必ずしも眞を傳へざれども、時代人情の一致、近きものありこすれば悽慘また歴史を刻む。祈願遂に空しく西海の波に洗はれ、願求悲しくも壽永元曆の嵐に散る。今夏安藝宮島に遊んで相國豪壯の蹟を見、秋、重衡の災禍ここの曼荼羅を見る。退いて靜かに一門の盛

衰を思へば幻華に幻華を畫く。山上秋晩の陰濕、この黝づめる血痕中尊の悽慘を襲ふ。又肅殺の時に及ぶか。

頭血を交じへ畫きたる曼荼羅に幾世か人の迷ひ冷たし

曼荼羅の縁をめぐりてそのかみの牡丹は重く神さびてあり

靈寶又さまざまなり。

ままろび泣く獅子の悲しさ「應徳」の涅槃繪姿鮮かにあり

清原家納經の紺紙金泥、卷頭佛像の寫描すべてかの金色堂裡の調律を思はせ、又三代榮華の古を語る。

みちのくのかの清原が納めたる紺紙み經は淡きみ佛

微雨さ暮靄さ、珍しき幽渺の間、新裝の金堂を拜み、又大塔を仰ぐ。朦朧よく形象を律動化し、煙雨まことに聖境の

聖微なり。

そほ降るや霧に浮べる堂塔のおほろけなれば山の尊し

不動堂ひまり鎌倉の造營、王朝の優雅を繼ぎて又實實を加ふ。

鎌倉の力をのこす堂影のこの夕暮を雨の煙れる

導かれて總持院の宿舍に入る。宏壯濶達よく旅愁を法悦に繋ぐ。

僧房は寛の音の夜に澄みて淋しさ人の旅をめざます

初更、梶原、中田兩氏の訪を受け、又大毎社阿曾沼氏の勞を煩はして明日をはかる。天野社清楚にして靈寶多ければ

こて山路登攀の指揮を仰ぐ。山上靜寂にして緩語急調盡きざるが如く、また歡會一夜の追懷なり。

雲幾重越えて登りし聖境にまた人間のはかなさを聞く

正像の二時さへ悲し末法の今にしあれば人を恨みず

高山の霜に晴るゝかしみじみ秋の夜更けは寒さしみ來る
深更にして三氏を送る。

盡きぬものあれざれども霜沍えに更けて別るゝ人を送れば

三

八日雨なし。霜葉林泉を飾り、朝靄堂塔に靡く。

僧房の曉白らむころなれば窓を開きて霜の色見る

林泉のめぐるはあり霜葉の彩れるあり寺の朝あけ

山菜のかをりかすかに淡羹の暖かにして靜かなる朝

この日、行程の指揮を梶原氏に乞ひ、宿房を出で、金剛三昧院を訪ぬ、鎌倉の寶塔を拜み、又襖に宗丹の梅樹を見る。

寶塔のこけらに苔のむしむして鎌倉の世は今に美はし

燭さして格間に残る繪のあみを探れば淡き昔なりけり

宗丹の梅ひこもみを擴けたる襖つゞきて山靜かなり

廟道、墓こゝに多し。

恩讐を越えて祀れる三界の萬靈にして秋山にあり

大師今にましませば廟前嚴かに、燈籠又聖意を含む。

燈籠のこもし續きて千年を経て來ぬればか山の尊し

大師今にましますものを山深み尙さりけなく霧の罩むるか

舊詞あり。

かゞやける日ざしを浴びてかぎりなく南無遍照の旅を行くもの
林道を紅葉谷に急ぐ。

山奥のぬかるみ踏みてひたぶるに山の無きかに山たづね行く

幽邃曾て知らざる高野あり。飛泉幾百尺の巖頭を碎け流れて千仞の底に走る。紅葉巖角にしがむで緑樹に畫く。飛泉
ご霜葉ご緑樹ご、加ふるに飛橋の危きあつて興を危急にそゝる。光(くわう)の瀧なり。

岩走る水幾尋を落ち落ちて白きが走る光の瀧津瀨

勞を芳醴に流し、興を遊化に誘ふ。高山にして鬱蒼、水源豊かにして水量喧しきに響き、飛沫全溪を覆ふ。勝景たゞ
稀に觀る。無聲の韻律を賦し、同行六客、六心相映じてこの清郷に應ふ。誠に解放の命なり。

幾くまはり岩かけ廻り幾まはり新に秋を見出すこの日か

神谷に迎へられて客中客を重ね、窓を押して「鬼の瀨」の霜葉を見る。すべて時なり。紙をのべて一二を綴る。

水白き光の瀧の岩角に紅葉々々のかゞやける日を

高野山神谷の里はくれなるの紅葉交ゆる山をめぐらす

もみぢするその日なれども新生に湧き來る泉岩かけにあり

驛頭、車に遅れ、草花霜葉の鮮彩に呼ばる。

ものゝ實の赤くかゝれる峰の上を雲の白きが動く高野路

上古澤より天野に到る。高嶺秋天を劃り、峻坂今眼前に峙つ。輕装更に輕きを試み、布傘の軸を杖として歩に歩を登
る。柑子の青き、熟柿の赤き、惠まれて衣囊にあり。

芳香を柑子に慕ひ芳醴を熟柿になめて登る山道

霜多き峰のこの目を龍膽のなほくさむらの草にかゞめり

峻坂極まるころ、高野連峰の別れ、今なればこて

八葉の蓮華の峰も今にして別れに聞けば惜しむ峠路

千五百秋瑞穂の國の瑞穂して山峽の田の日にはかゞやく

四

天野、丹生都比賣社は黄熟の瑞穂にめぐらされ、鬱密の神名備に圍まれたる神殿、社格官幣大社を掲げ、神橋殊に莊麗なり。樓門足利の式を傳へ、社殿亦昔を語る。神前に拜み、許されて寶庫の人となり、燭して國寶の多きを拜む。神輿の古き足利の古に屬す云ふ。座を飾る劍矢に巴に鉞形に、かの東大寺法華堂の壇側に似る。記して他日に備ふ。

神名備に紅葉を交へ大前に田の面色より丹生都比賣宮

「正平」のかしこきみかぎ筆こめて残したまへる經のひこ卷

薄暮社頭を辭す。坂路二里餘、妙寺まで二時にして足らず云へども、餘すころ時許、駆けるが如く險路を登り、飛ぶが如く微光の急坂を下る。脚遂に硬く、跣爲に痛む。平野の微明、大河の一脈を遙かに低く畫く。路次、船渉すべき河なれども、尙甚だ遠く、時半時を餘さず。流汗背を洗ひ、又眉を頬に流る。命、綿の如くにし妙寺驛頭に着き、汗を拭ふの時なく、車上の人となる。別辭、謝辭を併すも、車轍既に騒音なり。あはたゞしさ限りなし。和歌山驛に車をかへ、難波に饑寒を醫し、地下を走つて梅田に出で、夜陰に戦ひて洛に入る。旅愁、親しき友の如し。

やるせなき旅の心に道を聞く姿照らせし灯をば忘れじ

はつるなきこの淋しさをこの旅の嬉しきものとなしはてゝあり